



小田実全集（小説 第41巻）

河 1



講談社
小田実全集
Makoto Oda



目次

登場人物一覧

4

関連地図

8

河 1 (第一章～第十三章)

11

関連略年譜

512

登場人物一覽

木村重夫（きむらしげお） 一九一四年、朝鮮人の父と日本人の母との間に生まれる。関東大震災被災後、朝鮮独立運動のために危険な任務に就いた父の姿を追い求めつつ、中国、朝鮮半島全域で

激しくなる反日・独立・革命闘争の渦中で成長していく。朝鮮名、玄重夫（ヒョンジュンブ）。

木村文羅（きむらぶんら） 重夫の父。一八八九年、濟州島生まれ。朝鮮名、玄文羅（ヒョンムンラ）。

木村美智子（きむらみちこ） 重夫の母。一八九一年、神戸の貿易商の長女として生まれる。

広州の伯父（美智子の長兄） 広州で、独立して貿易商を営む。

神戸の伯父（美智子の次兄） 重夫の祖父の跡を継いで神戸で貿易商を営む。

上海の伯父（美智子の三兄） 神戸の貿易会社の子会社として上海で貿易商を営む。

李雷山（リーレイシャン） 神戸へ移り住んだ重夫が当地の小学校で知り合った同級生。老舗中国料理店の三男。

李朗山（リーランシャン） 雷山の兄、次男。

李梅華（リーメイファ） 雷山、朗山の妹。

キャシー アイルランド人女性。神戸での重夫の英語の個人教授の先生。

シュナイダー 徳島・板東俘虜収容所で捕虜生活を送ったことのあるドイツ人貿易商。

高（コウ）博士 京城（現・ソウルのあたり）に医院を構える医者。

金雅絹（キムアギョン） 高博士の知人の女性。

東（ひがし） 大阪のとある新聞社の中国通記者。

中川（なかがわ） 京城を本拠にして手広く商売をしている人物。

中西登（なかにしのぼる） 上海の日本人小学校での重夫の同級生。

岡田（おかだ） 日本人の父と朝鮮人の母の間に生まれる。神戸で警察に捕まるが、逃亡して朝鮮・中国へ。

ベティ 上海・フランス租界での重夫の家の中国人家政婦（アママ）。

朴寿福（パクスボク） 上海で重夫が習い始めた朝鮮語の先生。

崔在植（チェジェシク） 朴が住む長屋の朝鮮人労働者の長男。

高敬信（コウキョンシン） 高博士の遠縁。

ウォッシュバーン 上海の伯父の家に雇われた「流れ者」のアメリカ人青年。

《歴史上の人物》

孫文（そんぶん／スンウエン 一八六六～一九二五） 中国の革命家。中華民国創始者。

陳其美（ちんきび／チェンチーメイ 一八七八～一九一六） 孫文の側の軍人。上海の商団や裏組

織「青幫」^{チンバン}で力を持つ。

杜月笙（とげつしょう／トウユエション 一八八八～一九五二） 「青幫」の大頭目。

袁世凱（えんせいがい／ユワンシーカイ 一八五九～一九一六） 清末の新軍・北洋軍閥の首領。中華民

国の初代大總統。

張作霖（ちようさくりん／チャンツオリン 一八七五～一九二八） 奉天派軍閥の代表的人物。

吳佩孚（ごはいふ／ウーペイフー 一八七四～一九三九） 北洋軍閥直隸派の代表的人物。

胡漢民（こかんみん／フーハンミン 一八七九～一九三六） 孫文の側近。広東政府で重責を担う政治家。

汪精衛（おうせいえい／ワンチンウエイ 一八八三～一九四四） 孫文の側近として党務軍務に重責を果

たす政治家。別名汪兆銘。

廖仲愷（りようちゆうがい／リアオチョンカイ 一八七七～一九二五） 孫文の側近。国民党左派の重鎮。

周恩来（しゅうおんらい／チョウエンライ 一八九八～一九七六） 中華人民共和国首相。本書当時は広

州黄埔軍官学校の政治部副主任。

蔣介石（しょうかいせき／チャンチエシー「チャンカイセック」 一八八七～一九七五） 中華民国總統。

本書当時は黄埔軍官学校校長。

呂運亨（りようんこう／ヨウンヒョン 一八八五～一九四七） 朝鮮人民共和国副主席。一九一九年の大韓民国上海臨時政府樹立に積極的な役割を担う。

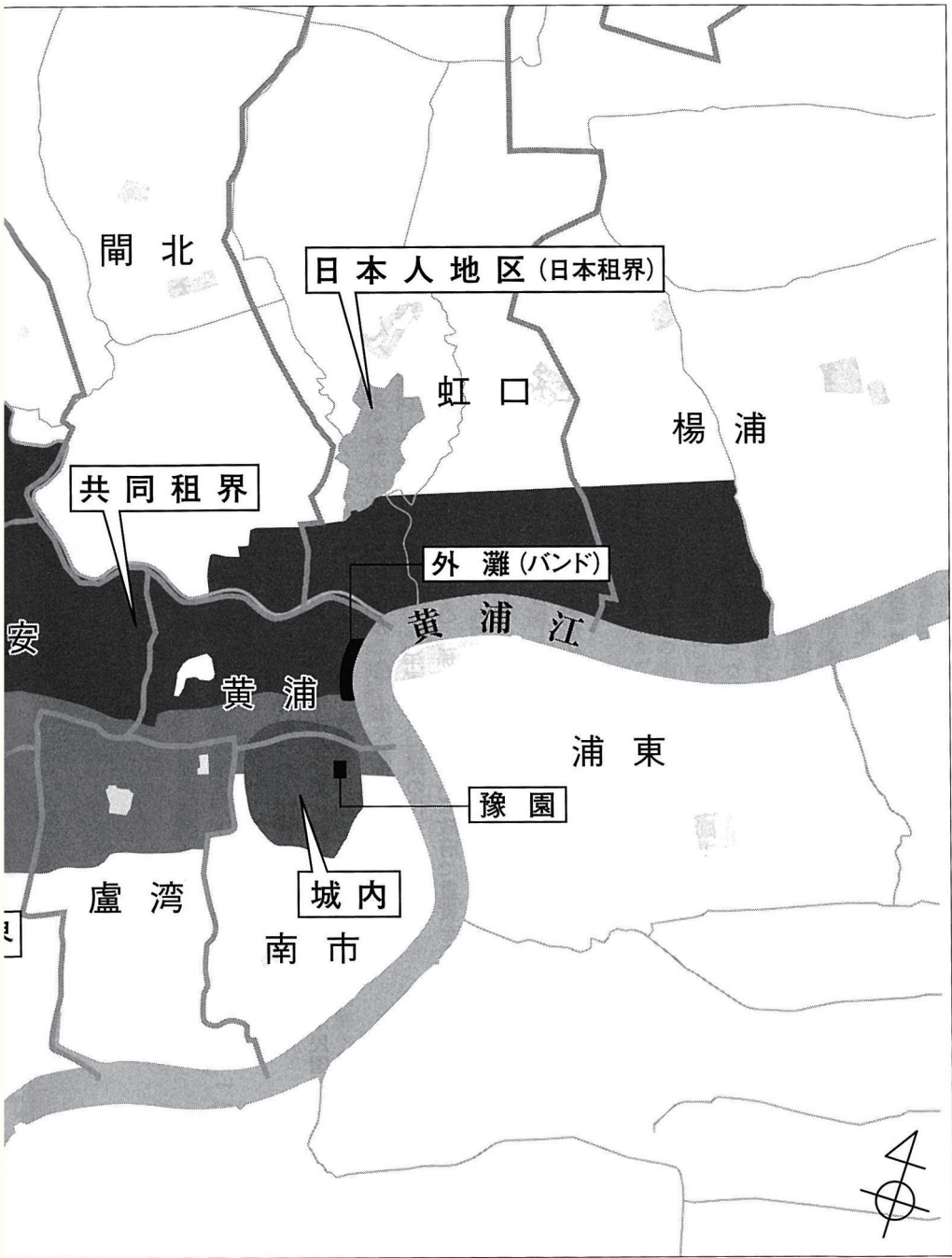
安昌浩（あんしょうこう／アンチャンホ 一八七八～一九三八） 上海臨時政府のリーダーのひとり。

金九（きんきゅう／キムグウ 一八七六～一九四九） 甲午農民戦争に参加した愛国者。上海の臨時政府にも参加。

李東輝（りとうき／イトンファイ 一八七三～一九三五） 韓人社会党を組織。上海の臨時政府にも参加。

安重根（あんじゅうこん／アンジュングン 一八七九～一九一〇） 伊藤博文を暗殺した朝鮮の反日独立運動家。

ガーレン（Galen 本名ワシーリイ・ブリュッケル Vasilij Bryukher 一八八九～一九三八） ソ連の将軍。コミンテルンから派遣された広東政府軍の軍事顧問。



上海市街図 (1930年頃)

普 陀

長 寧

静

フランス租界

徐 匯



1920年代の東アジア

河
1

(第一章～第十三章)

第一章

一

思ひ出そうとして眼を閉じると、いつも火焰^{かえん}で眼のなかが真っ赤になった。真紅^{しんく}の火焰だ。火焰は燃え上がり、眼のなかいっぱいにひろがり、内側から眼を焼きつくそうとした。眼ばかりではなかった。からだがどこからだの奥底から噴き出て来る火焰で燃え上がった。全身が激しい熱気をおびて火照^{ほて}り、吐く息までが熱くなった。あと深い疲労感と虚脱感が全身をとらえ、重夫^{しげお}はいつもしばらく身動きできなかった。

奇妙なことに地震自体のことは、重夫はほとんど記憶していなかった。地震は大地を根もとからゆるがせ、重夫の住居のあった四軒つづきの棟割^{むねわり}長屋をふくめて地上のありとあらゆる家屋、建物を根こそぎ崩壊させたが、重夫の記憶の始まりはその怖るべき大地震ではなかった。万物崩壊のあとしばらく経って始まり、そこに長年住み、それぞれに暮らしを立てて生きて来た住民の生命もろとも地上のすべてを燃え上がらせ、焼きつくした火焰から重夫の記憶は始まっている。

たぶん、その瞬間に半ば気を失なってしまうていたのだろう、棟割長屋が倒壊してその下敷きになった瞬間の記憶は重夫にはない。そのあと父親の腕で強引に引き摺^ずり出されて救われたときのこと

も、彼はおぼろげにしか憶えていない。彼が明瞭に記憶しているのは、倒壊のあとただの屋根瓦^{やねがわら}その他の瓦礫^{がれき}と材木の堆積と化した長屋の残骸からなんとか家財道具のかけらでも取り出そうと懸命になっていた父親や母親や四軒長屋の他の住民たちに加わって、彼も自分なりにあれこれ動いてあらかな無益な努力をしているうちに、見渡すかぎり同じように瓦礫と材木の残骸となつた街の一角が突然火焰を噴き上げて燃え上がったことだ。そのときまでも街のあちこちで火の手が上がり、煙と熱気がすであたりに充滿していたにちがいないが、重夫は憶えていない。明瞭に記憶に残っているのは、その突然の火焰の噴出だ。火焰は底抜けに明るく、真つ赤だつた。そのあとすぐ周囲のあちこちで真紅の火焰の柱が次つぎに立つた。火の柱はそれぞれにみるみるふくれ上がり、たがいにつながり合つて、またたく間に重夫たちのまわりを取り囲むようにして火焰の壁ができ上がった。同時にその真紅の火焰の壁からいちだんと激しい煙と熱気が混じり合い、ゴウツと狂暴な音をたてて吹きつけて来た。重夫は思わず顔をそむけたが手おくれだつた。彼はむせて、咳^せき込んだ。

「みんなで逃げる。」

父親の声がした。いつにないせつぱつまつた大声で短く言つてから、重夫の背中をさすりながらつづけた。

「逃げないと、みんな焼け死ぬ。」

「ほんと？」

と思わずふるえる声で訊ね返したのは、それがまさにそのときつぎに重夫自身が思ったことであつたからだ。父親の言う「みんな」は彼自身をふくめての家族「みんな」だつた。それはすぐ判つ

た。ついこのあいだ誕生日を迎えたばかりの九歳、小学校三年生の自分が死ぬ、まして火焰に巻き込まれて焼け死ぬとは、重夫がこれまで一度たりとも考えなかったことだ。

「ほんとだ。」

父親は請け合うようにことばを返したが、本来なら彼をいつそう怯えさせたはずのそのことばで逆に彼が安心できたような気になったのは、父親の声がさっきのせつばつまった大声から、いつもの低い、太い声に立ち戻っていたからだ。

「逃げんとアカン。」

関西の人間でない父親は神戸生まれ、育ちの母親がよく口にする「アカン」はめつたに使ったことがなかった。それをそのときわざとらしく下手な抑揚までつけて使ったのは、重夫と母親の怯えを少しでもやわらげようとしてのことだったのかも知れない。あとになってその一瞬のことを考えるたびに重夫はそう考えたが、「アカン」のあとを父親はいつもの低い、太い声で、「いいか、みんなで逃げる。みんなで逃げれば、焼け死ぬことはない」と「みんな」に力を込めて自分のことばを確認するように落ちついた言い方でつづけた。重夫と母親に自分のことばを確認させただけではなかった。父親は自分で自分に確認していた。そう重夫は感じとった。「お父さん、逃げる言うて、どこへ逃げはる。」母親が上ずったかん高い声で父親の落ちついた声に覆いかぶせるように叫んで、せつかく一瞬の落ちつきを取り戻していた重夫をまた怯えさせた。

「あっちだ。」

父親は母親の叫びを押さえ込むように左利きの彼の利き腕の左腕をゆつくり——重夫の眼にあきら

かにそう見えた動作であげて左手の火焰の壁のそこだけくろずんで見える一個所を指した。

「あそこが火の切れ目だ。あそこに道がある。そこを逃げる。」

そう短く低い、太い声で言ってから、父親は重夫と母親の手首を左右の腕でつかんで、そのまま二人をからだの両側に引き摺るようにして大腿に歩き出した。そのとき重夫が明瞭に記憶しているのは、父親の声とその動きに励まされたようにそれまで呆然と棟割長屋の瓦礫と材木の残骸のまえに立っていた四軒長屋の他の住民たちがいつせいに三人のあとを追うようにして歩き出したことだが、そのあと彼らがどうなったか、重夫はまったく知らない。

歩き出してすぐ父親はいつのまに用意していたのか、「これで鼻と口を覆え」と短く言って、水で濡らした手拭いとハンカチを、手拭いは重夫、ハンカチは母親にそれぞれすばやく手渡した。「あなた……」と自分は何も持たないでいる父親を心配げに見て母親は言ったが、「おれはいい、大丈夫だ」と父親は強く言い返して、また二人をからだの両側に引き摺るようにして歩き出した。

どこをどう歩いたのか、そのあと記憶はたしかではない。憶えているのは、ただ火焰だ。火焰は三人のまわりで、頭上で、激しく燃え、唸り、吠えた。火焰に取り囲まれるとき、火焰が吐き出す煙が太陽の光をさえぎるぶあつい幕をかたちづくって、まっ昼間が深夜の暗黒になる。それはそのとき重夫がはじめて知ったことでもあれば、記憶に強く焼きついたこともある。頭上高く、火焰が渦巻く上に夜空——そうとしか見えない真つ暗な空が不気味にひろがっているのが見えた。火焰の壁の切れ目の道の奥深くに入り込んで行くにつれて、火焰が巻き起こす風もさらに力を強めた。トタン板らしいものが何枚も頭上を飛んだかと思うと、もつと重い梁のような材木も燃え上がって真紅の火焰を吐

き出しながら飛んだ。髪の毛が焦^こげる臭いがした。母親は慌てて道ばたに落ちていたボロ切れを頭にひつかぶった。頭部が無性に熱くなつて来た重夫も父親が拾つてくれた小さな座布トンのような物を頭の上に載せた。もうさつきまで鼻と口を覆っていた手拭いもハンカチも二人は捨てていた。二つともカラカラに乾いてしまつて役に立たなかつた。父親はボロ切れも座布トンも頭にかぶらず、火焰のなか、かわらず二人を強い腕の力で両側に引き摺るようにして歩いた。ときには重夫は父親の大腿の歩行について行けなくなつて駆け出したが、父親自身は駆けなかつた。いつも同じ大腿の歩調で歩いた。煙と煙の刺戟^{しげき}でとめどなく流れ出て来る涙とで、重夫の眼は見えなくなつていたが、父親の眼はそのときでも見えていたのか。のちになつて重夫が知つた言い方で言えば、まさに父親はアシユラのごとく火焰のなかを歩いていた。いや、そうだつたにちがいない。重夫と母親はただアシユラに引き摺られて歩いた。ときには駆けた。「しつかりしろ。ここさえ抜けたら、みんなは助かる。」ときどきアシユラは二人を声をはり上げてシツタした。「みんなは生きられる。」アシユラはくり返した。

しかし、無限に「ここさえ抜ければ」の「ここ」はつづいた。それは火焰地獄が果てしなくつづいたことだ。重夫はほんとうに泣き出していた。もう煙の刺戟で涙が出ているのではなかつた。彼は泣きじやくりながら歩いた。いや、ただ父親の強い腕の力で引き摺られていた。ズックの靴の底が地面の熱気で燃え上がった。足もともから頭上からもまわりからもからだが燃えた。そして、もう彼はくたびれ果てていた。どこでもよい、この熱い地面の上でもよい、どこかへ身を投げ出して横たわりたかつた。死んでもよい、ただ、そうしなかつた。重夫は渾身^{こんしん}の力で彼を引き摺る父親にあらがい、腕を振りはらおうとしながら「おれはもう行かん。ここで死ぬ」と叫んだ。「おまえが死ぬことは、み

んながここで死ぬことだ。死ぬのはいつでもできる。今はみんなが生きているのだ。」父親は叫び返し、さらに彼を引き摺る腕の力を強めた。

それでもついに火勢が弱まるどころまでたどり着いた。それは重夫にも顔にぶち当たって来る熱風の勢いが急におとろえたことですぐ判った。彼はおそろおそろ眼を開いた。まだあちこちで火の手が上がつていたが、まわりは一面の焼跡だった。そこに何時間かまえまでのような街並みがあったのか重夫には見当もつかなかったが、今は中心に先端が焼け落ちて欠けた真つ黒く焼け焦げた太い樹木の幹が一本、そのまわりのところどころにさつきまで燃えさかっていたにちがいない火焰のあとをくろずんだ壁面の色に歴然と残した壁の残骸が立つだけの赤茶けた瓦礫のただの面積——そうとしか言えないすべてが焼け落ちた焼野原がひろがっているだけだ。どこからどう迷い込んで来たのか、いや、どこをどう逃げおおせて来たのか、真つ黒いカラスがいつとう手まえのひときわくろずんだ壁の残骸の上にとまっている。

父親は腕の力をゆるめた。重夫の全身はずるずると父親の腰から脚、膝、足というぐあいに父親のからだにそつて下降して、足もとにうずくまった。母親も父親のからだの反対側で同じことをした。いや、二人がうずくまったところで、父親自身がうずくまった。父親の大きなからだは自分の重みに耐えかねたように崩れ落ちた。父親が二人のあいだにうずくまったおかげで、三人のからだはまるでまんまるに抱き合ったようにひとつになった。母親がとたんに泣き出した。重夫の耳にそれが突然聞こえた。重夫も母親の泣き声につられたように泣き出した。父親は黙っていた。父親がそのとき泣いていたかどうか、重夫は知らない。

助かったというよろこびの気持があつた。それは重夫の体内で躍つていた。しかし、同時にその気持の底にいたいこれからどうなるかという不安と言うに言われぬ重い悲しみがべつとりとついていた。それは母親も同じだつただろうと思う。いや、父親も。そのときそう感じとつたのか、それともあとでそう考え出したのか、重夫には定かではないが、三人の気持はその躍り上がるようなよろこびとその底にべつとりとついた不安と重い悲しみの二つで、ひとつになつていた。いつ思つたのか、考え出したのかにせよ、まんまるに抱き合つたようにひとつになつた三人の姿かたちと同じように三人の気持が期せずしてひとつになつたこと——それはたしかなこととして重夫の記憶にある。それを思い出している、そのまんまるに抱き合つた三人の姿かたちが重夫の眼にいつでも見えて来るような気がした。

しばらくして父親はようやく口をきき出した。……自分たちは風に逆らつて風上にむかつて歩いた。それは火元にむかつて、火焰の壁の切れ目から火焰の海のなかに入つて、火焰の海の切れ目にそつて動いたことだ。多くの人はみんな風下にむかつて逃げ、逃げ足より速い火焰の動きに追いつかれて焼け死んだ。自分たちは大胆に逆に動いた。それはそうするほか火焰の海を脱出できないと判断したからだ。苦しかったのは当然のことだが、おかげで短時間に火焰の海を突き切つて、ここまで無事に生きてたどり着くことができた。わたしも辛かつたが、おまえたちもよくがんばつてくれた。お礼を言う。まだこれからも何が起こるか判らない。しかし、もうここは火焰だけは来ない場所だ。燃える物はないみんな燃えてしまった。いや、ただひとつだけ残っている。それはここにいるわたしら三人みんなだ。……まとめ上げて言えばそういう意味のことになることを父親はボソボソつぶやくようにしてしゃ

べった。いつもの低い、太い声でだったが、いつもの、いや、さつき火焰の壁の切れ目に三人で突入するまえまでの力は声になかった。深い疲労がそのままに出た低い、太い声で、父親は言った。おしまい、燃える物はひとつ残っている、それは自分たち三人みんなだと言ったとき、父親はたしかに軽く笑い出そうとしたにちがいはなかったが、笑いはそれらしい声がわずかに出かかっただけであとがつづかなかった。「これから、わたしたち、どうなります。」父親のことはが終るのを待ちかねたように母親が怯えた声で口を出した。その母親のことばで重夫が愕然^{がくぜん}として夢から覚めた気になったのは、それがさつきから彼が心の底でずっと思つて来たことでもあつたからだ。「判らん。」父親はきつぱりした言い方で応じてから、「しかし、とにかくわたしら三人、あの火のなかをみんなで死なずに生きて来た。これからも、三人、みんなで生きる」と自分で自分のことばを確認するようにも、重夫と母親の二人に確認させるようにもとれる低い、太い、ようやく力が少し立ち戻つて来た声でつづけた。

やがて無性に喉のかわきをおぼえた重夫は父親にそう言った。あとから考えてふしぎでならないことだったが、父親は立ち上がり、重夫も立たせて、その先に水の出どころがあるのを知っているかのような自信をもった足どりで歩き出した。「いつしよに来るんだ。」父親はふり返つて言った。放心したように立っていた重夫も歩き始めた。もうすっかり暗くなつて来ていた。深海の底のように暗いなかを二人は歩いた。

瓦礫の上は歩きにくかった。瓦礫はまだまだ熱気をもっていた。何度もけつまずきながら、重夫は父親のあとをのろのろ追つた。父親もべつに水のありかを知っているわけでないことは、先を歩きながらあちこちに顔をむけているので判った。しかし、しばらく歩くと、くらがりのなかにほんとうに

小さな池があるのが見えた。父親はふり返つて、「ほらね」というぐあいに目くばせした。重夫も「やっぱり」というぐあいに目くばせを返した。父親と自分は見えない強いヒモでつながっている。そんな気持が不意にした。

池には瓦礫と泥がいつぱいにつまっていた。ただ、それでも端のほうに小さな水たまりが見えた。父親はそこに重夫をうづくまらせ、自分も横にうづくまった。見えないヒモで結ばれた親子二人は並んで、水たまりに顔を突っ込み、泥だらけの水を小さな子供が水遊びでもするように手ですくって飲んだ。大半が泥だったが、それは舌に堆積したが、それでも水は残った。その水をむさぼり飲んだ。喉に入れた。からだのうちいつぱいに水は流れた。ようやく渇きがいやされたあと、重夫は手で顔に水をかけた。ほんとうに小さな子供が水遊びをするようにしばらくそうしていた。小さな子供のときが、平和で何の苦しみもなかったことが突然よみがえって来た氣に一瞬なった。もう少しのところで涙が出そうになった。涙を懸命にこらえた。

そのあいだに父親は立ち上がり、少しのあいだ姿を消していたかと思ったら、焼け焦げた飯盒はんごうの蓋を手にして戻って来た。「お母さんのために水を持って行こう。」短く言つて、父親はかがみ込んだ。長い時間をかけて、見えないヒモで結ばれた親子二人は、見えないヒモで結ばれたもうひとりのためにその半ばへちやげた蓋に手で苦心して水を入れた。小さな子供の水遊びはつづいた。重夫は幼稚園の子供、いや、もっと幼いときの自分に立ち戻っていた。

ようやく水が蓋にいつぱいになり、父親が水をこぼさないように蓋を捧さかげ持つようにして静かに立ち上がったあと彼もゆつくり立ち上がったところで、重夫は水たまりのむこうのくらやみのなかに黒

い物がいくつか折り重なって横たわっているのに気がついた。父親はとつくの昔に知っていて彼に言わなかっただけのことだったかも知れないが、そのいくつか横たわった黒い物が焼死体の堆積であることは父親に教えてもらわずとも重夫にもすぐはつきり判った。黒い物は「モノ」ではなく、よく学校でみんなが口にする「ブツ」だった。その言い方で重夫にことばが頭に浮かんで来た。黒い物は大小三つ。彼はそう眺め、そう踏んだ。男と女、そして、二人のあいだの子供。三人は、いや、三つの黒い物はうつ伏せに折り重なるようにして水たまりのむこうの瓦礫と泥の上にあつた。さつきあの火焰の海のなかで焼け死んでいたら、自分も父親、母親といつしよになってこんなふうになっていたのだ、という思いがのろろとやって来た。しかし、重夫は何も言わなかった。父親も言わなかった。見えないヒモで結ばれた二人は何ごともしなかつたように、何ものも見なかつたようにして黙ってまた歩きにくい瓦礫の上を歩き出した。

しかし、二人の背後から臭いが追いかけて来た。それはすぐ追いつき、重夫はこれまでに嗅いだことのない異常に強い臭いを嗅いだ。その魚が大量に腐ったような、即座に吐き気を催させる臭いがさつきの黒い物が発する臭いであることはこれもまた父親に教えられずとも重夫にすぐ判ったことだ。重夫は臭いから逃れるように足を速めたが、臭いはしつこくあとを追って来た。あたかも黒い物と彼と父親とのあいだも見えないヒモが結びつけているようだった。重夫は異常にこわくなつてあとをふり返った。父親が彼のすぐあとを母親のための水をこぼすまいとして両手で飯盒の蓋を抱きかかえるようにしておなかのまえに持つてゆつくり歩く姿が眼に入つた。蓋の水に注意を集中しているのか、彼はその蓋が宝物でもあるかのようにいつになく緊張したいかめしい顔をしていた。

その九月一日の夜は、重夫は父親、母親といっしょにそこでそのまま野宿して一夜を過した。瓦礫を三人で踏んで少し平らにした上に、重夫をはさんで三人は横になって寝た。風のぐあいによつてか、また、周囲のあちこちで火焰は燃え上がった。ときどき火の粉が風に煽^{あお}られて飛んで来て、そのたびに重夫は身を縮こまらせた。ここには燃える物がただひとつだけ残っている、それは重夫たち三人だという父親のことばが耳によみがえつて来ていた。燃える物^{もの}ではない、燃える物だ^{ぶつ}。燃える物^{ぶつ}は火の粉で燃え上がればすぐ黒い物^{ぶつ}になる。重夫は父親にからだをすり寄せた。父親も見えないヒモをたぐり寄せるように黙つてからだを近づけてくれた。そう思うと、少し安心した氣に重夫はなつた。

そのうち重夫が氣がついたのは、何人か、何組か、どこからか三人同様火焰を逃れて来た人たちが、焼跡に避難して来ていたことだ。今もつてつづく火焰で明るくなつた夜空とは対照的に地上は暗かつたが、それでも重夫が頭をもたげてまわりを見まわしてみると、黒い人影がうごめき、のろのろ動くのが見えた。話し声ときどき聞こえて来た。疲れ果てているのが少し聞いただけで判る元氣のない声だ。その声でボソボソしゃべる。それでも自分たち家族のほかに生きている人間がいることを知るの、元氣の出ることだ。そう思つて重夫はくらやみから聞こえて来る話し声に耳を澄ませた。

ふと耳についた声があつた。話し声とはちがつた種類の声だ。誰かが歌をうたつていた。何の歌か聞きとれなかつたし、聞きとれてもまったく知らない歌であるかも知れなかつたが、歌声は重夫の氣持を落ちつかせた。そのおかげか、重夫はいつのまにか眠り始めた。重夫の疲労はまがいなく限界

に来ていた。ストンと意識が切れたかと思うと、深い眠りに入った。ストン、そして、深い眠りだ。

それからどれくらいの高き眠っていたのだろうか、ふと気がつくと、うたう声がまた聞こえて来ていた。さっきのように遠くから聞こえて来ている歌声ではない。つい耳もとで歌声はした。聞き慣れた、父親の低い、太い声が、口のなかでつぶやくように小声でうたっていた。重夫がおどろいたのは、父親が歌をうたうのを彼が聞いたことがなかったからだ。いつかふしぎに思ってた重夫は母親に「お父さんはどうして歌をうたわないのだろう」と訊ねかかった。「そうね、どうしてうたわないのかしらね」と母親はげげんな顔をした。そう重夫に言われてあらためて気がついたという顔だ。「昔はうたいはつたのに」と母親はその顔でふしぎそうにつづけてからひと言、同じ口調でつけ加えた。「歌上手なのに。」

眼を覚ましましたことが判ると父親がうたうのをやめてしまうとなぜかとき思えたので、重夫は眼を閉じたままで耳を澄ませた。重夫のまったく知らない、これまで聞いたこともない歌だ。歌詞もいくら聞きとろうとして懸命になっても、まるで外国語の歌のように判らない。悲しげで、重苦しい歌だった。聞いていると、心が重くなつた。しかし、惹きつけられもした。重夫はさらに耳を澄ませた。

歌詞のなかで何度もうくり返されることばがひとつ、耳に残った。とうとうたまりかねて、重夫は眼を開き、火焰の照り返しで焼けたのと煙の煤^{すす}とで皮膚の全体が赤黒くなつた横の父親の顔を見上げて、「お父さん、アリランて、何」と訊ねた。半分ほどが熱で崩れて欠けた石に背中を当てて、上半身を起こした姿勢でうたっていた父親は不意を衝^つかれたようにうたうのをやめて、その表情で重夫を見下ろした。一瞬、たしかにためらいがあった。そう重夫は感じとつたが、父親はすぐ「峠の名前だ」と短く答えた。「どこの峠。」重夫も短く訊ね返した。「わたしが住んでいた場所の近くの峠だ。」父親は

すぐ答を返してくれたが、また一瞬のためらいがあったように重夫は感じていた。「そこはお父さんの生まれたところですか」と重夫は念を押すようにちよつとあらたまつた言い方でつづけた。

「ちがう。」父親は軽くかぶりをふつた。「わたしの生まれたところはべつのところ……島だ。」「何という島。」重夫は訊ね返したが、答はなかった。「重夫、おなかが空いた^すだろう。」答える代わりに、父親はまったくべつのことばを口に出した。まったくべつのことばではあつたが、それはずつとさつきから重夫が思っていたことだったから、凶星のことばでもあつた。さつきもおなかが空いたので、空きすぎたので眼を覚ましてしまったのだ。父親にそう言われて、重夫は余計空腹を全身で感じとつた。無理もなかった。昼の食事をすませたところで地震が起こつて、そのあと何ひとつ口に入れないのだ。さつきまで奇妙なことに空腹をまったく感じていなかったのは、それだけ精神が緊張しきつていたからだろう。重夫は眠るまえに父親が奇蹟の水のありかを探し出したようにどこか食物のありかを知っているのではないかと一瞬淡い期待をもつたが、「食い物はないよ」と父親はあつさり期待を否定した。そのあと、「しかし、明日にはある。食い物も何もかも、きつとすべてよくなる」と父親が励ますように言い出したのは、それほど重夫が落胆した顔をしたからかも知れない。「心配しないで、重夫、今は眠るんだ。おまえは眠る。」父親のそのことばのあとを、重夫は「お父さんは……」と自然なことばの流れで訊ね返した。「わたしも眠る。」父親は重夫の顔を安心させるようにゆつくり見下ろした。

重夫が安心して眠れるような気がしたのは、父親のことばよりそのやさしげな表情のせいであつたかも知れない。「お休み」と重夫は小声で言い、眼を閉じた。

父親はまた静かな声でうたい出していた。また歌詞の判らない歌だ。それでも重夫は歌詞のはじめの部分は父親が何度かくり返してうたっているうちに憶えることができた。ウリアギチャジャンチャジャン。重夫は眼をつむったままその部分を口に出してから、「これ、何の歌」と短く訊ねた。「子守り歌。」父親も短く答えてから、「ウリアギチャジャンチャジャンは、わたしの赤ちゃん、お眠り、お眠りということだ」と註釈をつけてみせるようにつづけた。

「それ、どこの国のことば。」

重夫は眼を閉じたままで訊ねた。

「日本の国のことばでない……」

そうつづけて言って、自信なげに「……んでしょう」とつけ加えた。

「朝鮮の国のことばだよ。」

父親はことばを選びとるようにしてゆっくり答えた。

「しかし、今は日本の国と朝鮮の国はいつしよになってひとつの国になったのだから、日本の国のことばでもある。……わたしが朝鮮の人間だが、日本の人間であるようにね。」

父親は重夫に言っているようにも自分で自分に言っているようにもとれるゆっくりした言い方で言った。

「これは朝鮮の国の南のはてにあるわたしの生まれた島の子守り歌だ。わたしの母親、おまえのおばあさんがよくわたしにうたってくれた。」

父親はまた口のなかでつぶやくように小声でうたい出した。ウリアギチャジャンチャジャン。ウリ

アギチャジャンチャジャン。父親のその声は眠りを誘った。自然に重夫の目蓋は重くなり、いつのまにか重夫は眠り始めたが、今度は、ストン、眠った、というのではなかった。徐々にゆっくり深い眠りに入った。

三

翌日——九月二日の夜までの重夫の記憶は朦朧もうろうとしていた。ところどころ切れてもいる。たしかに憶えているのは、朝がた、余燼よじんがくすぶるなかをもとの住居のあとにまで立ち戻ったことだ。しかし、そこは何もなかった。ただの焼跡、瓦礫の堆積だった。しばらくそこで焼け残りの何かを求めているとか、瓦礫の堆積を父親がどこ近くで拾って来た柄えが焼け落ちて欠けた黒焦げのシヨベルで掘り起こすのを手伝った記憶が重夫にはある。出て来たのは、茶碗やら皿やらのそのままそこに捨てて来た物ばかりだったが、そんなことよりはつきり彼が憶えているのは、その作業のあいだに、同じように自分の住居のあとを見に来たにちがいない母親の近所の知人が通りかかって、彼女が持参していたおにぎりをひとつ、重夫たちに恵んでくれたことだ。さいわい大人のコブシほどの大きさのあるおにぎりだったが、父親はそれを二つに割り、半分を重夫にあたえたあと、あと半分をまた二つに割って自分と母親に分けた。重夫はそのときのことはその分け方まで奇妙にあぎやかに憶えているのだが、その半分のおにぎりはこの世のものと思えないほどにおいしかった。重夫はむさぼり食べた。なかに入っていた梅干しもおしまいには味がまるつきりしなくなるまでしゃぶってからようやく足もとの黒焦げになったトタン板の上に吐き出した。

そのあいだ、父親はこれも母の知人に恵んでもらった煙草をうまそうにのんでいた。父親はべつに煙草好きのほうではなかったが、重夫はそんなふうに記憶しているのだが、そのときの父親はほんとうにうまそうに煙草をのんでいた。そのあと三人は父親の知人宅めざして焼野原のなかを歩いて行つたように思う。しかし、長いあいだかかってたどり着いた知人宅はこれもまたみごとに焼けていた。そこらあたり一面の瓦礫の堆積になつてゐるなかに三人が呆然と立っていた記憶は重夫にかすかにある。ただ、そこには知人が避難して行つた先の住所を書いた立て札が立てられていた。父親と母親はたがいにたしかめあうように交互にその行き先の文字を声を出して読んだ。ひとまずそこへ行くことにしよう——そう二人が話し合つてゐるのを聞いたことも重夫はぼんやり憶えている。しばらく休んだあと、三人はまた歩き出した。少し行つたところで、瓦礫のなかに突き出した水道管から噴き出ている水を三人はのんだ。これもこの世のものと思えないほどおいしかった。しかし、食い物はもうなかった。

長い、長い歩行だった。汗にまみれて、ただ歩いた。見知らぬところだったし、重夫は何より疲れ果てていた。そのあたりの重夫の記憶はすべてぼやけている。記憶の画面に紗しやがかかつて定かでない。そして、もう日は暮れかかつていた。いや、そのうち暮れた。紗のかかった画面ははじめ薄暗かった。そのうちまったく暗くなった。

その紗のかかった画面に突然明るい光がみなぎつて、すみずみまで明瞭になつた。三人は立ち止まつた。もう焼野原は終つて、家が建ち並んでいる。まともな、こわ毀れていない、昨日の午前中まで重夫の

住居もそうであつたような家だ。そのまともな家の列を両側にした道路の中心におどろくほど大きく明るい提灯ちようちんが立てられていた。重夫の記憶がそこで昨日の午後からの火焰の記憶とじかに結びつくのは、その提灯の記憶の画面いっぱいにひろがる明るい光のせいだろう。二つの記憶は結びつき、いつでも地震のことを思い出すと、眼のなかいっぱいに火焰がひろがつたあと、いやでも提灯の明るい光がこれも眼のなかいっぱいにみなぎる。

そういう大きな提灯のことを高張り提灯たかはと言うのだとはそのときは重夫は知らなかった。それはずつとあとになつて誰かが教えてくれたことだが（誰が教えてくれたのか。母親でないことはたしかだった。母親はその提灯のこともそのあと起こった一切のこともあとで口にしたことはなかった。重夫も訊ねたことはなかった）、その大提灯のまんなかに「自警団」とくろぐろと墨で大きく書かれていたことも、提灯の明るい光とともに重夫の眼に残っている。その異様に明るい光に三文字は鮮明に黒く浮かび上がって見えた。

その「自警団」の大提灯のまえには、提灯を背にして木刀や棒ぎれや大きな鉈なたを持った一団の男が何人も立っていた。洋服を着たのもシャツ姿のもユカタを着たのも火消し人足のあつしを羽織つたのもいて、服装もまちまちなら、年齢も年とつたのももつともつと年とつた白髪もいて種々雑多だったが、共通していたのは誰も彼もが険しい顔をしていたことだ。そのときとつさに重夫の心に浮かんできた言い方で言えば、これもまたこの世にないほど険しい、ただけしい顔だ。

なかにひとりキラリと光るあきらかにほんものの日本刀を抜き身で手にさげている男がいた。小柄な男で、体格の不足をその日本刀の抜き身で補うように一団の中心に下駄履きの足を踏んばつてい

ばったかつこうで立っていた。抜き身の切っ先は下にむけられていたが、いつ何どきでも刀はふり上げられて、切っ先は前方、いや、こちらを突く。重夫は冷やりとした。

帽子は大きな麦ワラ帽子で足は下駄だったが、古びてあちこち擦り切れていたもののこれもほんものの軍服を着ていたから、男は兵隊に行ったことがあるのにちがいはなかった。それで一団の隊長格になつていると踏めたが、この世のものでない険しい顔をした一団の男は彼のまわりで道路のまんなかに通せんぼうをするようにして立ちほだかつて、通行人ひとりひとりにむかつて口ぐちに喚^{わめ}きたてた。高張り提灯を背にして、一団の男の姿はその明るい、まぶしい光のなかに影絵のように黒く浮かび上がって見えた。

……おい、おまえ、日本人か。日本人とちがうだろう。鮮人だな。「ぼく」と言ってみろ。言えるか。アイウエオを言え。あんたはほんとうに日本人か。ごまかすな。日本人なら、チョク語を暗誦^{あんしやう}してみろ。何のチョク語？ 生意気言うな、キョウイクチョク語だ。それに決まっている。忘れた？ それでも、おまえ、日本人か。じゃあ、歴代天皇のお名前を言え。ごまかすな。ごまかすと、叩き殺すぞ。……

男の口ぐちの罵声^{ばせい}とともに木刀が動き棒ぎれが動き大鉈が動いた。いや、ほんものの日本刀の抜き身までが動いてキラリと光を放ち、切っ先が前方——こちらをむいた。

重夫たち通行人はその男の一団の通せんぼうのまえで列をつくって待っていた。いや、待たされていた。その記憶はある。ただ、いつたいどれだけの長さ待っていたのか。待たされていたのか。記憶はぼやけている。突然、男何人かの罵声につづいて声がした。「わたしは朝鮮人だが、日本人だ。そ

のどこがわるい。何がわるい。」声は重夫の全身をこわばらせた。それは、声が聞き慣れた父親の低い、太い声であつたからだ。しかし、あれはほんとうに父親の声だつたのか。ほんとうに低い、太い声はそう言つたのか。たしかなこととして重夫が記憶の底にとどめているのは、一瞬のうちに男の列が崩れて全員が重夫の少し先のところに立つた父親に躍りかかつて行つたことだ。

男はどなり、罵声をあげた。この鮮人、太いやつだ。鮮人がなんで日本人か。そんなことを言いやがつて、こいつ、ほんとうにフテイ鮮人だ。ぶちのめせ。叩き殺せ。罵声、怒号とともにまたたく間に父親の姿は猛り立つ男の群れのむこうに見えなくなつた。からだのぶつかり合う音が瞬時にでき上がった男の壁のむこうで激しくした。いや、もつと堅い、強固なものがからだにぶち当たる音だ。それでもまだ、低い、太い声は「わたしは朝鮮人だが、日本人だ。そのどこがわるい。何がわるい」と叫びつづけていたような気がする。重夫も叫びをあげた。いや、あげようとした。「お父さんに何をするんだ」と叫びながら、体当たりで男の壁にぶち当たつて行こうとした。しかし、叫びは口から出なかつたし、からだも動こうとしなかつた。重夫はただ立ちすくんでいた。全身をこわばらせて立ちすくんでいるあいだに、「わたしは朝鮮人だが、日本人だ。そのどこがわるい。何がわるい」と叫びつづける低い、太い声は男の壁のむこうで次第に遠ざかり、小さくなり、やがてまったく聞こえなくなつた。そのあいだにも堅い、強固なものがからだにぶち当たる音はつづいていた。音にまじつて、うめき声のような声が聞こえた。いや、聞こえたのか。

うしろから声が突然した。母親の上ずつた異常にかん高い声だ。声はふるえながらもふしぎに凜々しい口調で「この子もわたしも日本人です。朝鮮人とちがいます。まちがわないで下さい」と一団の

男を叱りつけるように言った。そのあと、さらに重夫をおどろかせたのは、母親がその凜々しい口調を彼にむけて来たことだ。「重夫、そうでしょう。おまえは日本人でしょう。朝鮮人とちがう。」「ぼくは日本人です。」重夫はキツパリ言った。それは事実だった。当然の答だったが、声は上ずっていて、ふるえていた。「ぼくは朝鮮人じゃない。日本人です。」彼は力を込めて言った。言うことで、力が出た。そう考えた。

「行け。」

日本刀の抜き身を持った男が言った。一団の隊長格の古びた軍服を着て、大きな麦ワラ帽子をかぶった、下駄履きの小男だ。首には大きな日本手拭を巻きつけている。男はゆっくり抜き身の刀をあげて、うしろをふり返りながら切っ先で背後を指してみせた。とたんに男の壁が崩れて重夫と母親の二人のために道路が開かれたが、両側に建ち並んだまともな家の屋並みのあいだをまっすぐに一直線に伸びて行く道路の先には人影はなかった。重夫と母親は、わずかな時間のあいだだったにちがいないが、そのあつげらかと伸びて行く道路をまえにして杳然と立っていたにちがいない。「奥さん、あんたがたはもう行つてよろしいんですが」と、抜き身の刀の小男の横で天秤棒らしい長い棒ぎれを持つて彼の衛兵のようにして立っていた、背丈が彼の二倍は優にあると思われた大男が、立ちすくんだように動かないでいる二人に身の安全を保証するように言った。二人はようやく歩き出した。重夫は歩き出したとき、ぶざまによろけた。

それからまた重夫の記憶はあちこちが欠落、あるいは、ぼやけている。

あつけらかと一直線に伸びる（それがそのときの重夫の実感だった）道路を少しそのまま歩き出したあと、母親が彼を連れて、そこらあたりを父親を探して歩きまわったことは、重夫は憶えている。しかし、いつたい、父親はどこへどう連れて行かれてしまったのか、どこにも姿はなかった。そのあたり、街には人影はなかったし、訊ねようにも、道路の両側のまともな家はどの家も戸をとぎしてかたくなに母親と重夫を寄せつけないように見えた。しかし、たとえ、道路に誰か出て来ていたとしても、どんなふうにも父親の行方のことを訊ねればよかったのか。母親はただ半狂乱になつて歩きまわるだけだったし、重夫はただ母親につき従うだけだった。

結局、最初めざしていた知人の行き先に行つてみることにした。立て札にあつた行き先だ。そう母親は重夫に相談して決めたのではない。彼女がそのまっすぐに伸びる道路のあたりでの父親の搜索をあきらめるようにしてその先を歩き出したときに、重夫が勝手にそう判断しただけのことだ。

また長い時間をかけて、二人はそこまで行つた。あとから考えると、よくそこまでたどり着いたものだと思う。まっすぐの道路のずっと先で運よく出会つた人に道をきいて、それで見通しがついた。その人は親切な人で、二人の姿からかわいそうな被災者だと見当をつけたのだろう、近くで奇蹟のように開いていた駄菓子屋に寄つて、芋アメをひと袋買つて重夫に手渡してくれた。二人で道みち、それを食べた。少し元気が出た。重夫は母親が訊ねるのでそう答えた。母親もうなずいて、「わたしもよ」とまるで小さい女の子が言うようなあどけない言い方で言つた。

しかし、せっかくなのだり着いた父親の知人の行き先は、「新井^{あらい}」という表札のかかつた五軒つづきの棟割長屋の小さな家だったが、戸は閉められていて留守だった。しばらく考えた末に決心をつけた

ように母親は隣家の戸を叩いたが、出て来た男の声は、けさ今朝がたから二、三日新井さんは留守にすると
言つて出かけたと思いがけないことを口に出した。

また歩き出した。歩き出すよりほかになかった。万策つきたかたちで、自分たちの住居のあとまで
戻ることにした。母親は何も言わなかったし、重夫も何もきかなかつたが、彼女がそうするつもりで
あることは彼にはすぐ判つた。それは、自分もそうするつもりでいたことだ。いや、そうするよりほ
かになかったことだ。まっすぐの道をかなりあと戻りしたあと、高張り提灯のあたりを避けて歩いて、
やがて焼野原の暗黒のひろがりに立ち戻ったところで、重夫が憶えているのは、そのとき何か奇妙に
安堵あんどした氣持になつたことだ。母親も同じ氣持になつていたのかも知れない。ふつと息をつく、そ
の呼吸の音が横に並んで闇のなかを歩く母親の口から聞こえて来た。

暗黒のひろがりのなかであちこち火が燃えていた。火災の残り火だつたかも知れないし、焼跡に残つ
た死体を焼く火だつたかも知れない。二人は無言で歩いた。ただ歩いた。

「ここよ。」

母親が突然立ち止まつて言つた。朝がた、父親も同じことばを口にして立ち止まつたことを重夫は
明瞭に思い出していた。そこに父親が先に立ち戻っているかも知れないという重夫と母親の二人が共
通して抱いたにちがいない期待は無残に打ち破られた。誰もそこにいなかった。立て札も立っていな
かった。二人は崩れ落ちるようにかがみ込んだ。二人はそのまま抱き合うようにして住居の瓦礫の上
に長い時間坐り込んでいた。重夫は昨夜も彼と父親と母親の三人でまんまるに抱き合うようにして
坐つたことを思い出していたが、ひとつちがうことがあつた。昨夜のまんまるは三人のまんまるだつ

たが、今は、ひとり欠けていた。重夫ははじめて泣いた。はじめは声をこらえていたが、そのうち堪え切れなくて声をあげて泣いた。母親は懸命に重夫の肩を叩いてなぐさめようとしていたが、そのうち彼女も声をあげて泣き出した。彼女のほうが激しいくらい鳴咽した。

四

大きな家だった。「お屋敷」ということばが、はじめ門を見たとき、重夫の頭に浮かんた。しかし、どうしようもないほど古びていた。屋根はちよつとしたお寺の本堂の屋根ほど大きかったが、瓦がちこち落ちて欠けていたし、白いシツクイ塗りの壁は一面にどすろく汚れている上にところどころ大きく剥げ落ちていた。庭も、手入れしていないことが庭に面した大きな座敷に通されたときに重夫にもすぐ判ったくらい荒れていた。池のまわりの木が倒れたままになっていれば、石灯笼の頭部が欠けて落ちたのがぶざまに立っている。重夫の記憶の画面に自然について先日まで彼が父親、母親と住んでいた、平和に暮らしていた東京の下町の住居の小さな「猫の額」の庭のさまが見えて来ていた。こんな大きな庭のある「お屋敷」で育ったので、母親は自分の住居の庭を「猫の額」の庭だとかばっていたにちがいない。

「猫の額」の庭には、小さな南天の木が一本、立っていた。小さくて幹も頼りなげに細い、見るからに貧弱な木だったが、その紅い粒々の実が小さい葉のあいだにつく木を父親はよく手入れしていて、重夫も手入れを手伝っているうちに愛着をもつようになった。しかし、南天の木を思い出すことは、今、考えないでおこうとしてここまで来る満員の汽車のなかで懸命に努力して来た、父親の姿が記憶の画

面の正面に大きく出現して来ることもある。重夫は画面から父親の姿をふり払うように庭にむけた頭を何度も大きくふった。

住居のあとにたどり着いた震災二夜目は、そこで重夫は母親と野宿した。二夜目の野宿は一夜目にくらべてはるかに不安で惨め^{みじ}だった。火災は全市にわたってあらかたもう鎮火^{しんか}していて、もう火の粉が頭上から降りかかつて来ることもなければ、行きどころがなくてそこまで立ち戻つて来て野宿する家族の姿もあちこちに見えてそれは心強いことだったが、重夫の一家には父親というかんじんの人間が欠けていた。幸いなことは、重夫も母親も二人ともにあまりに疲れ果てていたことだ。おかげで、その夜を不安と怯えでさいなまれて眠らずに過ぎさずにすんだ。お父さんはもう死んで帰つて来ないかも知れないと考え出す自分を懸命に押さえつけながら眼を閉じているうちに、重夫はいつのまにか眠ってしまった。

それからさらに二夜つづけて、重夫と母親は野宿をくり返した。三夜目は近くに立てられたテントのなかで眠ったが、それでも夜中、母親は住居のあとまで出かけた。一度は重夫もついて行つた。

日中は、母親はいつも姿を消した。父親の行方を探しに出かけているのはたしかだったが、どこをどう探しているのか、夕方帰つて来ると、行き倒れの病人のようにただぐったりと横になつてろくにももの言わなかった。重夫も訊ねなかった。重夫は日中住居のあとにただじつと坐っているか、そのあたりの焼跡をやみくもに歩きまわつた。そうしながら、父親がどこから帰つて来るのを待つているつもりだったが、父親はどこからも帰つて来なかった。ときどき、誰がどう世話しているのか、突然、

炊き出しのおにぎりを持って、警官や軍人や、ときには学生の一団が出現して来た。重夫は懸命に駆けて行って、列のなかに並び、彼と母親のためのおにぎりをなんとか確保した。「これを着ろ」と言つて、自分が身につけていた上つぱりをくれた学生がいた。重夫のところどころ焼け焦げた、そして、垢まみれ、汗まみれになつた学生服を憐れ^{あわ}んでくれたにちがいない。学生は重夫が学生服を脱いで上つぱりを身にまとつたのを見て、「これ、とられるなよ。フテイ鮮人がこのごろあばれとるらしいからな」と肩を叩きながら言つた。

「フテイ鮮人」の話を何度か耳にした。よく判らなかつたが、とにかく朝鮮人が地震のあと、あちこち火をつけまわつてゐるというのだ。いや、この重夫の住んでいたあたりをふくめて都市のあらかたを焼いた火災自体が朝鮮人のしわざだ。「フテイ鮮人」はそのよからぬ朝鮮人のことだ。いや、朝鮮人はみんな「フテイ鮮人」だ。

重夫は思いきつてお父さんは「フテイ鮮人」なのかと母親に訊ねた。母親は「そんなこときくものじゃありません」と言い返すにちがいないと思つたが、母親はしばらく黙り込んだあとで、「お父さんは日本人ですよ。生まれは朝鮮だけど、朝鮮は日本とヘイゴウでいつしよになつたのだから日本人です」と叱りつけるように言つた。重夫にそれ以上の追及を許さないようなきびしさがことばにこもつていて、重夫は黙り込んだが、母親はかたわらに落ちていた釘を使って「併合」と二文字の漢字を地面に書いてから、「これ、ヘイゴウと読みます。いいこと、これ、いつしよになること」と念を押すようにつづけた。口調が奇妙にいらだたしげだつた。

重夫はいつか父親がそのことばを大声で使つていたことを思い出した。地震の起こる少しまえのこ

とだ。ある日、学校から帰ると、母親が通せんぼうをするように玄関先に立つて唇に指を当てて、黙っている。と合図をした。重夫は仕方なしにしばらくそこに立っていたのだが、そのとき聞こえて来たのは、ときどき家にやって来て「ボン、このごろお父さん、どうしていなさる」と馴れ馴れしい口調でしつこくきいて来る得体の知れない男の声だった。その男の声が重夫に話しかけて来るときの馴れ馴れしい言い方で何かしつこく訊ねかけているようだったが、そのうちそのあいまに切れ切れに聞こえて来ていた父親の低い、太い声が急に大きくなって、「わたしは日本人ですよ」と言った。べつに声を荒だてているというのでもなかったが、父親はその一語をきっぱりともうそれ以上の男のこゝとばを断ち切るように口に出していた。そして、そのあとを同じきっぱりとした口調で「日本が朝鮮をハイゴウして、日本と朝鮮はいつしよになったのだから、わたしら朝鮮人はみんな日本国民じゃないですか、日本人じゃないですか」とつぶけた。

焼跡での三夜目は、近くに張られたテントのなかで寝た。その夜もはじめ住居のあとで寝ようとしたのだが、雨が降って来たのだ。テントで他の被災者とともに一夜を過ごすなかで、重夫はまた朝鮮人があちこちで火をつけてまわった、火をつけて掠奪りやくだつしてまわったというような話を何人かがしているのを耳にした。はじめは声をひそめての話だったが、そのうちみんなが声高にやりあっている。すんだ話ではない。今も朝鮮人どもはそんな怖ろしいことを平気でやってのけている。だから、街には今軍隊や自警団の手で非常線が張られて朝鮮人狩りをやっているのだと重夫にしたり顔に説明してくれるのまでが出て来た。もうそのころまでには、テントのなかに落ちていたビラの文面から知ったのか、はじめは聞いていて漢字でどう書くのか判らなかった「フテイ」がこれは以前から知っていた「鮮

人」と結びついて「フテイ鮮人」は「不逞鮮人」となってその四文字の漢字は明瞭に重夫の頭のなかに焼きついていたが、逆に人びとの話のなかでは「不逞鮮人」は消えていた。話は「朝鮮人」もしくは「鮮人」すべてがやったこと、やっていることになっていった。

母親は黙っていた。重夫も何も言わなかった。母親は人びとの話し声に耳を澄ましているふうにも、まったく聞き流しているようにもとれる無表情な顔でテントの片隅に坐っていた。重夫の眼に母親はそう見えたが、重夫もきつと同じことをして、母親の眼には同じように見えていたにちがいない。そのうちそれでも重夫は眠ってしまったが、こわい夜だった。それまでに火焰の夜をふくめて何度もこわい夜があつたのにその夜がいちばん怖ろしい夜だったとあとから考えていつもそう思うほど重夫は眠りのなかで怯えた。テントじゅうに重い、限りなく重いものが充満して、重夫のからだの上にのしかかって来る。何度も胸苦しきで重夫は眼を覚ました。母親も同じだったのかも知れない。何度か、夜中、母親はテントを脱け出して、小雨の降るなかを住居のあとまで出かけていた。一度は重夫もついて行つた。父親は帰つて来なかつたし、帰つて来るけはいもなかつた。しばらく二人は黙つて小雨の降りしきる暗闇のなかにむかいあわせに立っていた。

朝がた、「配給」のおにぎりをひとつあて食べたあと、母親はまたまだ小雨のつづくなかをどこかへ立ち去つた。重夫は雨のなか誰かに恵んでもらつた合羽^{かっぱ}をひきかぶつて住居のあとの瓦礫の山の上に坐つた。すでに焼跡整理の作業が始まつていた。手にシヨベルをもつた兵隊の一団がやつて来て、元気のよい声をかけ合いながら作業を始めた。そのうち一瞬かけ声がとまつたのは、瓦礫の山のなかから黒焦げの死体を掘り出したからだろう。「ホトケが出た」とひとかたまりの小声の塊^{かたまり}が雨のな

かから聞こえて来た。

昼まえ、母親が帰って来て、これから神戸の実家に帰ることにしたと突然宣言するように言った。突然だったが、ずっと以前から考えて来たことを実行に移す決断の重みが口調にこもっていた。「神戸？」と思わず重夫が訊ね返したのは、母親が神戸生まれ、神戸育ちで、生まれ育った実家が神戸に今もあり、重夫にとつてのおばあさんがそこにひとりで住んでいることは母親自身の口から聞いていたことではあつても、一度もそこへ連れて行ってもらつたことも、おばあさんに会つたこともなかったからだ。母親自身も、重夫が知るかぎり、実家へ帰つたこともなかったし、おばあさんの話も彼女がそこにひとりで住んで暮らしていること以外に何ひとつ話したことはなかった。

とにかく一度神戸の実家に重夫を連れて戻って、そこで身を落ちつけてから、またここに帰って来る。これが今できる最善のことだし、また、これしかできることはない。母親は考え抜いて来たことをもう一度自分にたしかめてみるように一語一語区切りながらしゃべつた。その話のあいだ、父親のことは母親は一度も言わなかった。重夫も訊ねなかった。母親は話し終つたあと、黙つて包みのなかから、二人の行き先を書いた立て札を取り出した。どこでどうつくつて来たのか、つくってもらつて来たのか、立て札はしっかりとつくりのものだった。二人は黙つて瓦礫の山にしっかりとそのしっかりとつくりの立て札を立てた。これが今自分たちができる最善のことだという母親のしゃべつた通りの思いが重夫にはした。たしかに、それしか今できることはなかった。

それから神戸にたどり着くまで二人はまる二日かかっている。どこをどう旅して行つたのか。まず

歩いた。それから兵隊を満載した軍のトラックに拾われて焼跡を走った。建物は焼け落ちて、むき出しのプラットフォームだけになった駅で降りて、いや、降ろされて、避難民で満員の汽車に乗った。何度も乗り換えた。どの汽車も満員だったが、次第におたがいボロを身にまとった避難民の数は減つて、ふつうの身なりをしたふつうの客の数が増えた。はじめはまったく目立たなかった重夫と母親の身なりのひどさが目立ち始めた。そばにいた人が急に席を立つて離れたりすることもあった。小さな子供が鼻をつまんで「臭いな」と言った。重夫も鼻をつまんで「おまえも臭いぞ」と言い返した。不逞鮮人の話はどこでも耳にした。いや、朝鮮人、鮮人の話だ。古い軍服を着た男が、鮮人はみんな叩き殺せ、とまへの席で言った。男はそのまま「自警団」の高張り提灯のまえにいた抜き身の日本刀の小男を思い出させた。母親が重夫の腕を強引に引き寄せたのは、そのとき放っておいたら、重夫が立ち上がって彼に飛びかかって行つたにちがいなかったからだつた。

大きな、古い家の荒れ果てた庭に面した座敷には、独立した座敷ほどに広い床の間を背にして途方もなく年とつた、そう重夫がはじめて姿を見たときにとつさに感じとつた女性が坐つていた。母親が「お坐り、重夫」といつにないきびしい口調で声をかけた。「坐つて、おまえのおばあさまに御挨拶しなさい。」重夫は母親に言われた通り、母親と並んで正座して坐り、畳に両手をついて礼をした。すべて横の母親を見ながらしたことだったが、「おまえのおばあさま」はおじぎをすませて頭を上げた重夫の顔を正面から見えるようにして見ながら、「この子がおまえの子供かね」とことばはまったく重夫を無視するように横の母親にかけた。「やつぱり、おまえによく似ている。」重夫は反射的に口

を出した。「ぼくはお父さんにもよく似ています。そうぼくはよく言われます。」自分でも思いがけなかったことばが口からよどみなく出ていた。「おまえのおばあさま」はちよつとおどろいたふうに重夫を見たが、何も言わなかった。「名前は何。」かわらず「おまえのおばあさま」は母親に訊ねかけた。重夫はまた自分から口を出した。「重夫です」と言ってから、二文字の漢字を手をあげて畳に指で書いてみせた。それで判ったのか、それともそんなことははじめからどうでもよかったのか、「おまえのおばあさま」は「何年生」とつづけて訊ねた。今度は母親にきいているのか、重夫に直接訊ねているのか判らないきき方だった。「三年生です」と重夫はハキハキした口調で応じた。いつもよりハキハキした言い方になっていると自分で感じた。その言い方にいきおいを借りたように、「ひとつ、きいていいですか」と、重夫は「おまえのおばあさま」の小ジワとシミが表皮一面に貼りついたようについた小さくしぼんだ顔を見返すようにして見ながらわるびれずに言った。母親が「やめなさい」というふうに重夫のまえに上体を乗り出してまで目くばせしたが、「おまえのおばあさま」はおどろいた顔はしたものの軽くなずいてみせた。重夫はつづけた。「おばあさまのお名前は何かですか。」またハキハキした言い方で訊ねていた。「わたしの名前はツルヨ。」「おまえのおばあさま」はそう言つて、重夫がしたように「鶴代」と二文字の漢字を畳に指で書いてみせた。そればかりではなかった。両腕を上になお上げて、鳥の飛ぶかつこうをやつてみせた。おかげで、そのときにはそれまで「おまえのおばあさま」の表情にとりついていていた膜のようなものがとれて、もう少しのところでは微笑が激しくそげ落ちた頬に浮かんで来るように見えた。しかし、そこまでは行かなかった。またすぐ膜が一枚、「おまえのおばあさま」の表情に貼りついて、いったん出かかったやわらかいものはすぐ顔全体から姿を

消した。

それでもあとで母親に言わせると、重夫の「おまえのおばあさま」とのそのやりとりがなかったなら、事態はもつと手きびしいことになっていたのかも知れなかった。その母親のことばがどれだけ当たっていたのか重夫には見当がつかなかったが、重夫と「おまえのおばあさま」とのやりとりが終ったあと、母親はようやく話を切り出す勇気を得たように、「わたしたち、東京から来ました。行く先が見つかるまで、少しのあいだ、ここにいさせて下さい」と切り口上に言った。母親は地震のことは一言も言わなかった。ただ、東京から来た、とだけ言った。重夫も同じことばを心のなかで言った。地震のことは彼も心のなかで一言も言わなかった。言うまいと心に決めていた。「おまえのおばあさま」は黙っていた。頬のそげ落ちた、ひからびた小さな顔ににらみつけるようなきついものが出た。それはふしぎに母親の顔を思わせた。怒ったとき、何か心に決めたとき、母親の顔に同じきついものが出た。重夫は、今、たぶん、母親も同じきついものが出た顔をしているのだろうと唐突に思った。「おまえのお父さんは、結婚は許さん、結婚するなら、親子の縁は切る。この家を出て行け、二度とこの家の敷居をまたぐな、と申されましたよ。」きついものが出た小さなひからびた顔がゆつくり言った。「おまえは、切つてもよい、そう言つて、出て行つていかれた。」母親は黙り込んでいた。「おまえのおばあさま」の小さなひからびた顔はつづけた。「おまえはお父さんがお亡くなりになったときにも帰つて来ませんでしたよ。」「それは……」母親は口ごもりながらさえぎつた。「帰つて来るな、帰つて来て、家に上げるなどおつしやつっていると聞いたものですから。」「誰から聞きました。」「おまえのおばあさま」は鋭く聞きとがめるように訊ね返した。少しの曖昧さあいまいも許さないようなきびしさが口調に出てい

た。「お兄さんからです」と母親はすぐ応じてから、彼女も曖昧さを許さないように「神戸の……」とつけ加えた。「とにかく……」「おまえのおばあさま」もひと呼吸おいてつづけた。「おまえはこれまで一度も帰って来ませんでしたよ。」ふつと間をおくようにして「おまえのおばあさま」と母親は二人ともに黙り込んだ。重夫は庭に眼をやった。白い翼と長い脚を持った鳥が荒れ果てた庭の頭部が欠けて落ちた灯籠の横をゆっくり歩いて行くのが見えた。

「あれは鶴ですか。」重夫は「おまえのおばあさま」のひからびた小さな顔をみつめながら訊ねた。「おばあさまの名前の……」とつけ加えかけたが、それより先に「おまえのおばあさま」が、「あれはサギ。……白サギ」と答えた。ここにはよく来る、白サギはこのあたりから西方にかけて多い鳥で、神戸の西の姫路のお城はこの鳥の姿によく似ていると言われて「白サギ城」と呼ばれている。音で読めば、「白口城」^{ハクジヨウ}。そんなことまで「おまえのおばあさま」はつづけてしゃべった。しゃべっているうちに口調が少しなごんだ。それは重夫にもよく判った。白サギは「おまえのおばあさま」が話しているあいだにも歩きつづけ、庭の端近くまで行くと立ち止まって白い翼をひろげた。重夫が思わず息をとめたのは、長い脚の上に優美に白い翼をひろげたその姿が地震のあとと始めて眼にし得た美しいものであったような気がしたからだ。いや、同時に、これが美しいものを見る見おさめであるような気もしていた。

「やつぱり、わたしたちはごやつかいにならないほうがよいと思います。」母親が意を決したように言い、腰を浮かしかけた。「出て行ってくれとは、わたしは申ししておりません。」「おまえのおばあさま」は静かにことばを返した。そして、ふと、思いついたように「おまえたち、地震で家をなくしたのか

い」と訊ねた。「ええ」と母親は短く答えた。「着のみのままで逃げました。」「それは、おまえたちを見ただけで判ったことでしたよ。」「おまえのおばあさま」は素気なく言ってからまた黙り込んだが、しばらくしてから、それはもう荒れ果てた庭から優美な白い翼の動きを見せてくれた白サギが姿を消したあとでのことだが、「おまえたちもたいへんだったね」とつぶやくように言った。そのことが、母親と重夫がしばらくここにいてよいという許しのことばであることはすぐ重夫に判ったが、そのときになっても父親のことは、その安否はおろか何ひとつ「おまえのおばあさま」が訊ねて来ていないことに彼は気づいてもいた。

少しの間をおいて、母親が言った。

「この子の父親はあとから来ます。」

「あとから来ます」の一語に母親は力を込めていた。

「まちがいなく来ます。」

念を押すようにさらに力を込めて母親は言った。

重夫も母親と同じことばを心のなかでくり返した。そうくり返すと、ほんとうに今にも父親がさつき白サギが姿を消したあたりから荒れ果てた庭に大股に入って来て、「おい、重夫、おれは帰って来たぞ」と低い、太い声で言い出すような気になった。魔法ではなかった。あれだけの火焰の海のなかをみんなで生きて来たのだ。それは当然あり得べきことだった。そう重夫は思った。いや、信じた。

つづきは製品版でお読みください。